

都市に重層する二面性

—森鷗外「普請中」論—

坂本 主史

はじめに

森鷗外「普請中」は、明治四三年六月に「三田文学」に発表された短編小説である。阿部次郎は「普請中」が発表された翌月の「ホトトギス」で、「今月の小説中の圧巻」にして「一篇を貫く気分は冷たい淋しい底にも一道の精気があつて讀者の心に迫るものがある」とした上で、「現今の日本に對する皮肉や人生其物（及自己）に對する皮肉がキビくと而も態とらしからず現れてゐる」と述べた。さらに「舞姫」の作者が此「普請中」の作者になつたかと思ふと、人生は淋しいものだ」と、作中に漂う淋しさを讀み

取り、「渡邊參事官」と、彼がドイツにいた頃の恋人だった「女」の間の感情のすれ違いについて「舞姫」のエリスと豊太郎を並べて比較している（1）。阿部の同時代評をはじめ多くの先行研究では、「舞姫」だけに限らず、鷗外のドイツ留学やその後の体験といった伝記的事実を根拠として、他の作品との関連を指摘する論や渡邊と鷗外を重ねて考察する論が多く見られる。例えば、三島由紀夫は「半ば絶望しながら建設に携わつていた知識人の像は、今日のやうな、絶望しつつ建設とは無縁に生きてゐる知識人の像」とは異なることを主張し、「深い諦観」に浸りながらも「普請に参画」する渡邊に鷗外が重なるとした（2）。

しかし、こうした官僚としての鷗外像とは異なる鷗外像を提示したのが竹盛天雄である。竹盛は渡邊から女への「視点の混乱」「転換のぎこちなさ」に着目し、鷗外の「西洋への憧憬」の現れを見ている（3）。さらに、この「視点の混乱」という点から語り手に着目したのが、西村好子（4）や小平克（5）などの論である。西村らは語りの主体が渡邊から、より俯瞰的な視点へ変化していることに言及し、そこに鷗外の意図が現れているとした。

また、清田文武（6）や竹田日出夫（7）のように、鷗外のドイツ留学における体験が「舞姫」を書く契機になつたとした上で、「舞姫」と「普請中」との関連性を指摘する論も多い。その中で磯貝英夫は、鷗外日記に見られる精養軒などホテルでの外国人との交流に「普請中」執筆の契機を認めている（8）。

近年では、岩谷泰之が明治二十年代の東京市区改正を引き合いに、テクスト内の都市構造に注目している。岩谷は「衛生新誌」における「政府には人民に向けて『爾等を健康にせん』と誓ふの責任あり」という鷗外の発言（9）に、彼の都市開発に対する責任感が現れていると述べ、水路の整備不足や鉄道の延伸に伴う衛生面での課題こそ（普請中）という言葉の指し示すものだとした（10）。

このように、従来の「普請中」研究は、鷗外のドイツ留学体験などの伝記的事実に基づいて（普請中）という表現が指し示すもの、および（普請中）の日本に對する渡邊の考え方が鷗外のそれと同一であると考察されてきた。しかし、伝記的事実を重視するあまり、普請中が発表された時点をテクスト内時間とすることが定説のように扱われてしまっている。そこで本稿では、作者鷗外の伝記的事実を切り離し、都市空間論的視点から分析することで、テクスト内時間当時における一般的な都市イメージ、登場人物と都市との関わり、特に渡邊の心象と都市の結びつきを明らかにしたい。

一、都市の歴史的事実から見る「普請中」

分析にあたり、まずはテクスト内の時空間を確定したい。「普請中」は、渡邊が旧知の女との会食のため木挽町を訪れる場面から始まる。彼は電車で木挽町に來ると、河岸沿いに歩いて精養軒に至り、女と会食する。そして、女が精養軒から銀座通りを通じて人力車で愛宕山のホテルへと帰っていく場面で物語は終わる。つまり「普請中」は、京橋区木挽町周辺から芝区愛宕山周辺までを舞台とした物語であると

言える。

次に、テクスト内時間についてである。この点について先行研究では、主に鷗外の伝記的事実から「発表当時」テクスト内時間」として考えられてきた。しかし、「普請中」が発表された明治四三年当時、舞台となる精養軒はすでに落成しており、改築中ではなかった。ここに齟齬が生じてしまうのだが、先行研究ではこの食い違いについての考察がなされていない。

女との会食の舞台となる「精養軒」は、改築中の精養軒として登場する。当館が改築工事を行っていたのは、明治四〇年から明治四二年一月のことである(11)。また、渡邊が窓の外を眺めて「右のほずれの方には幅広く視野を遮って、海軍参考館の赤煉瓦がいかめしく立はだかっている」と語る海軍参考館は、明治四一年五月に開館している(12)。よって、テクストに描かれているのは明治四一年五月から明治四二年一月までのとある一日に限定される。さらに、彼が通された「食事の室」には「ロッドダンドロン(論者注: シャクナゲ)などを組み合わせた花籠が用意されていた。『新編植物図説』によれば、シャクナゲの開花期は五月頃であるため(13)、テクスト内時間は、明治四一年か四二年のいずれか五月頃の

一日、と考えられる。

では、明治四一、二年ごろの木挽町と愛宕山の周辺はどのような場所だったのか。

明治における「最前線」

—京橋区木挽町と西洋建築物—

まず、京橋区木挽町周辺についてである。大塚美保は「普請中」における明治四〇年ごろの築地について、次のように説明している。

隅田川が東京湾に注ぐ河口に面した築地は、幕末に軍艦操練所が設置されて以来、明治期にも海軍関係の用地・施設が集中した海防の拠点であり(テクストにも「海軍参考館」の存在が書き込まれている)、また明治三二年まで外国人居留地が置かれていた土地でもある。(14)

大塚の言葉を借りれば、築地は「海を越えて訪れる欧米列強に日本が接触する最前線」だった。大塚は築地に限定して述べているが、これは木挽町についても同様である。テクストに登場する精養軒について中村敏弘は、西洋料理を提供する店として、軍

人や政府関係者、外国要人をもてなすために重宝されるとともに、西洋料理の出前や日本人への西洋文化の指導により、結果として東京に西洋文化を広める役割を果たしたと指摘している(15)。つまり、明治四〇年ごろの東京において精養軒は、西洋人と日本人の交流の要であり、西洋文化を広く発信する存在だった。その意味で、精養軒もまた欧米と日本が接触する「最前線」なのである。

では、精養軒の周辺に佇む建築物はどのような場所だったのか。まず、渡邊が電車を降りた「歌舞伎座」についてである。歌舞伎座は、現在まで度重なる改修・再建工事によってその姿を変えてきた。テクスト内に描かれているのは、その第一期(明治二二年一月〜明治四四年一月)の建物である。第一期歌舞伎座の設計について、政府が理想としていたのは「パリのオペラ座を範とするような純洋式の劇場」だった。「客席は棧敷席を残し、その上にシャンドリアが輝く和洋折衷様式」で当初の理想とは違ったものの、劇場の正面にはアーチが並び、ギリシヤ神殿に由来する三角破風が聳える「洋風の外観を誇」る建築物となった(16)。日本の伝統的芸能である歌舞伎と西洋文化の一体化を図った劇場は、多くの人々の目を引いた。

次に、渡邊が窓の外を眺める場面で登場する、煉瓦造りの海軍参考館についてである。この施設は『東京風景』によれば「築地の一角に新設せられたる」記念館で、館内には「日露役の戦利品を始め交戦中敵弾に触れたる軍艦の破片及鉄砲劍戟の折損せしもの」を陳列し、軍籍にある人に限らず、一般にも広く公開されていた(17)。煉瓦造りと言えば、逋信省の庁舎もまた「東洋一の大建築」と評されるほどの煉瓦造り三階建てであった(18)。この庁舎は明治四〇年の火災によって焼失しており、テクスト内にあるのは、再建工事の最中であつたと考えられる。桐敷真次郎によれば、明治における西洋建築の代表が赤煉瓦を用いた建築物であり、煉瓦の国として知られた北ドイツ同様、建築用石材に乏しい日本において石材を組み合わせて使うには都合がよく、赤煉瓦が多用されたという(19)。

このように、明治四一、二年ごろの日本において木挽町は、精養軒の料理や赤煉瓦建築などの西洋文化を感じることが出来る「最前線」であり、先進的な都市イメージを象徴する土地であった。

また、精養軒周辺に佇む多くの西洋的、先進的な建築物の精細な描写によって、精養軒の内装のちぐはぐさが際立っている。この点についての詳しい分

析は第三章に譲るが、木挽町周辺には、西洋文化に触れる「最前線」としての都市イメージだけでなく、精養軒の（外部）と（内部）における（西洋）と（日本）の対比が現れているのである。

・二、都市の光と影―芝区愛宕山と貧民窟―

では次に、渡邊との会食を終えた女が帰る場所である、愛宕山周辺について考える。テクストにおいて、女は「愛宕山に泊まっている」と渡邊に告げる。当時愛宕山にあった外国人が利用できるような宿泊施設は「ホテル愛宕館」のみである。したがって、女が宿泊しているのはこのホテル愛宕館であると考えられる。しかし、物語の結末で女は「芝の方へ」帰ると表現されている。宿泊先へ帰るのだから、女のように「愛宕山」と言っても渡邊のように「愛宕」と言ってもいいはずなのだが、なぜ「芝」と表現されるのか。ここで芝という地名が選ばれた理由は何なのだろうか。

当時の愛宕山について、佐藤紘司は次のように述べている。

明治20年代になると、高塔から眺望を商品化（登

昌記』の中で、愛宕山頂からの眺望について次のように記している。

景を玩んで欄に倚る者、頭を並べ手を累ぬ。遠鏡を窺ふ者あり。曰く、「北方の山、近くして黒き者は、忍岡（論者注：現上野）なり。遠くして翠なる者は、筑波なり。前後二道、白くして明らかなるものは、利根・隅田の二水なり。聳ゆる者は鴻台（論者注：現千葉県市川市）なり。平らかなる者は葛西なり。（22）

愛宕山は江戸時代を通して山頂から街並みや海が一望でき、花見、月見の季節や初日の出の名所として有名だった。愛宕塔やホテル愛宕館が建築される以前から観光名所だったのである。

愛宕山が前時代からの観光名所だった一方で、その付近、芝区新網町はこの先進性と対極の都市イメージを象徴する。下谷万年町、浅草松葉町、芝新網、四谷鮫ヶ橋はいずれも江戸時代からの貧民窟だが、なかでも愛宕山に近い新網町は、松原岩五郎が『最暗黒之東京』で「茲に日本一貧乏者の麴園なり」と記しているように、数ある貧民窟の中でも特に貧しい者が集まっていたのだ。水道や下水の整備も行き

覧券を購人）され、愛宕山にも「愛宕塔」が建設された。「愛宕塔」は、「愛宕山ハ東京第一の高塔」の広告が各新聞社に掲載された。塔には「窺眼鏡（覗きからくり）」「露台（バルコニー）」「望遠鏡」など当時としては人目を惹きつける要素を兼ね備えていた。（20）

愛宕山はこの「愛宕塔」をシンボルとして、人々が眺望を楽しむために集まる観光名所の一つであった。さらに、日本への来訪外国人は日露戦争終戦から著しく増加し、明治三九年ごろの東京の宿泊施設における外国人客は「帝国ホテルは九十二人、三人、築地のメトロポールは八十人、セントラル・ホテル、愛宕館、有明館など多種洋風の設備ある宿屋は大抵満員の盛況」となる程多かつた（21）。つまり当時の愛宕山は、外国人も利用するホテル愛宕館と、多くの人が集まる愛宕塔という、先進的な都市イメージを象徴する建築物があった観光名所だったと言える。だが、ここで注視すべきは、すでに江戸時代から愛宕山が観光名所だった点だろう。愛宕山は、慶長八年に徳川家康によって愛宕権現が勧請されたことに始まる。さらに愛宕権現には、息子秀忠によって本殿や拝殿などが建立された。寺門静軒は『江戸繁

届いてはおらず、極めて不衛生な環境であった（23）。

つまり愛宕山周辺は、前時代から観光名所だった愛宕山と、前時代から貧民窟だった新網町という、都市の光と影を凝縮した土地と言えよう。さらに愛宕山の上下においては、上は観光名所としての裕福な都市イメージが、下は貧民窟としての貧困な都市イメージが暗示されている。

以上のように、京橋区木挽町周辺と芝区愛宕山周辺には、先進的な土地と前時代的な土地という対極の都市イメージが暗示され、芝区愛宕山の上下では、裕福と貧困という対極のイメージが暗示されているのである。これらの対照的なイメージを示すには、女の行き先が、明るさと暗さの両方を内包する土地でなくてはならない。そのため、芝という地名が選ばれたのだ。

二、〈不安定〉な女と〈安定〉した渡邊

さて、ここまでテクスト内時間当時の都市の様相を確認してきた。これらの都市のありようは、登場人物たちとどのように関わっているのだろうか。

まず、女についてである。「普請中」の結末にあるのは、愛宕山に宿泊している彼女が人力車で帰って

いく場面である。

まだ八時半頃であった。燈火の海のような銀座通を横切って、ウエールに深く面を包んだ女を載せた、一輛の寂しい車が芝の方へ駆けて行った。(24)

ここで注意したいのは、女が人力車で帰っていく点と、彼女の向かう先が「愛宕山」ではなく「芝の方へ」という二点である。

彼女の乗る人力車は、明治四〇年代当時には、電車の隆盛によってすでに衰退しつつあった乗り物である。斉藤兼次郎は「この頃の車夫が電車のためにその職を奪われ」ており、「ことに貧民窟の車夫は一般人の想像を得られぬほど悲惨」であったと述べている(25)。さらに、彼女が帰るのは芝方面である。芝区にある貧民窟の新網町周辺には、多くの人力車夫が住んでいた。その数は新網町に暮らす諸職人の半数ほどを占めており、当時の車夫の困窮した生活が窺える(26)。

つまり、女が「愛宕」ではなく「芝の方へ」と帰る結末の場面に暗示されているのは、愛宕山の上下に象徴される対極のイメージなのである。

この対極のイメージは、女が移動する場所という指標だけでなく、その「身の上」にも表れている。彼女は、精養軒を訪れた際「気の落ち着くような身の上ではない」と言う。さらに「まだお金は沢山ある」と樂觀する彼女だが、渡邊にその金もいつかは底をつくと諫められている。つまりここでいう「気の落ち着くような身の上ではない」とは、彼女が経済的に安定していないことを意味している。

渡邊とドイツで出会った女は、ロシア、日本へと移動し、さらにアメリカへ渡ることができず、転々と移動し、特定の場所に安住することができず、転々と移動し、その先々で稼ぐ生活を送っているのである。しかし、その移動先でも収入が安定する保証はない。彼女の整った身なりからは裕福さが、渡邊とドイツで会っていた頃にはなかったという濃い隈からは、これまでの苦勞が窺える。こうした描写からは、収入が安定していない、いわば(不安定)な女の裕福さが読み取れる。

その女の宿泊先が、愛宕山山頂のホテル愛宕館なのである。先に述べたように、このホテル愛宕館は、愛宕山周辺において西洋文化に触れる先進的な場所であった。また、愛宕山山頂へ行くには「男坂」「女坂」という階段を上るか、「新坂」という坂を上るか

の三つの方法があった(27)。木挽町とホテル愛宕館を人力車で行き来する場合のルートは、新坂しかない。そのため、彼女はこの新坂を使って愛宕山の上下を行き来したと考えられる。愛宕山の上下には、それぞれ裕福と貧困が暗示されている。そして彼女は、一歩間違えるだけで金に困るような不安定な生活を送っている。つまり、彼女は裕福と貧困を行き来している存在なのである。

この意味で、裕福と貧困という対極の都市イメージを内包する愛宕山周辺は、彼女の不安定な「身の上」を象徴していると言える。結末の女が「燈火の海のような銀座通」から芝へと向かう描写は、単に移動ルートを示すだけに留まらない。これは都市の光と影を鮮明にし、明るい場所から暗い場所へと向かう不安定な女の姿そのものが示されているのである。

一方、女の不安定さが都市に投影されることで、渡邊の安定した生活が浮き彫りになる。「参事官」「官吏」とあるように、国家公務員である彼は安定した収入が国から保証されている。参事官とは、国家行政機関における官職の一つである。「各省官制通則」によれば、各省の次官、局長に次ぐ地位にある奏任官を指す(28)。さらに「高等官官等俸給令」中の「高

等文官官等相当俸給表」によれば、参事官の官等は三等であり、その俸給は「高等文官年俸二号表」の一級俸に依拠する。よって、渡邊の年俸は二五〇〇円程度と思われる(29)。明治四三年に高等官官等俸給令の改定が行われるまで、参事官の俸給に変化はない。

彼の経済状況と比較するために、テクスト内にも登場する人力車夫の収入を取り上げてみよう。横山源之助『日本之下層社会』によれば、明治三二年当時の人力車夫の収入平均は、一日五〇銭だったという(30)。一年間休まずに働いても、一八二円五〇銭である。つまり参事官は、車夫の十倍以上の収入を得ていたことになる。これは「普請中」当時の日本においても、非常に高収入であった。彼は社会的にも経済的にも極めて(安定)しているのだ。

では、(不安定)な生活を送る女とは対極とも言える(安定)した生活を送る渡邊の心象は、テクスト内にどのような形で現れているのか。

三、「渡邊参事官」の(内部)と(外部)

木挽町を訪れた渡邊は、周囲の様子を見ながら精養軒へと向かう。階段を上って精養軒の中に入ると、

彼はさまざまな批判を口にし始める。

給仕に案内されながら「此辺まで入り込んで見れば、ますます釘を打つ音や手斧を掛ける音が聞こえて来る」ことに気づき、「大分賑やかな音がするね」と皮肉る。食事をする場所にはふさわしくない騒がしさだと言うのである。

「食事の室」へと案内されると、部屋の大小や盛花などを確認し、二人で使うには「丁度好い」部屋だと評価する。しかし、それでも完全に満足した様子ではなく、「少々満足」するに止まっている。窓の外を眺めた後は、サロンの内装を見ながら、さらに批評を重ねていく。

渡邊はソファに腰を掛けて、サロンの中を見廻した。壁のところどころには、偶然ここで落ち合ったというような掛物が幾つも掛けてある。梅に鶯やら、浦島が子やら、鷹やら、どれもこれも小さい丈の小さい幅なので、天井の高い壁に掛けられたのが、尻を端折ったように見える。食卓の拵である室の入り口を挟んで、聯のような物の掛けてあるのを見れば、某大教正の書いた神代文字というものである。日本は芸術の国ではない。(31)

た準備が整っていることを評価するはずである。つまり、彼は「日本から見た西洋」ではなく、「西洋から見た西洋」について批評しているのである。

しかし、その彼が、普段は自分の姿を偽って生活していると言う。女に「あなた官吏でしょう」と言われた後の場面である。

「うむ。官吏だ。」

「お行儀が好くつて。」

「恐ろしく好い。本当のフィリステルになり済ましていく。きょうの晩飯丈が破格なのだ。」(32)

「フィリステル」とは「俗物。固陋な人間」を意味する(33)。「フィリステル」について小平は、貴族社会当時のドイツの学生が「一般庶民を精神的向上心のない物的欲望にとらわれた人々とみてその形容語とした」と述べ、この言葉が、渡邊による「地位のある今は向上心を失い、自己栄達と金銭欲のみで生きているとの自嘲である」とした(34)。彼は参事官、官吏であるために、普段から社会的にふさわしい立ち振る舞いを求められる立場にあった。社会的に求められる姿が「フィリステル」であり、彼が周囲の人間に見せなくてはならない姿なのである。この点

壁にある掛物たちを見て、「偶然ここで落ち合った」ようであると渡邊は言う。つまり壁に掛けられた作品は、何か意図やテーマがあつて集められたのではなく、手あたり次第に集められたような印象を受けると述べているのである。さらに、日本式の低い壁に合わせて作られた「小さい丈の短い幅」の掛物は、西洋式の高い壁には調和しておらず、彼の目には「尻を端折ったように見え」てしまう。そして最後に「某大教正の書いた神代文字」に目を向け、「日本は芸術の国ではない」と言い切る。

このように、彼は精養軒の内装について、西洋式の壁と日本の作品の調和がとれていないこと、言い換えれば、西洋と日本のすり合わせに失敗していることを指摘している。西洋的文化と接触する「最前線」の象徴であるはずの精養軒の内装ですら、西洋と日本が調和していない。その意味で、「日本は芸術の国ではない」のである。この指摘は、彼の評価軸が西洋的な視点に基づいていることを示している。

仮に日本的な視点から批評するのであれば、掛物といった細部よりも、精養軒全体、部屋全体に取り入れられた西洋の様式を見るだろう。「食事の室」や並べられた食器類に関しても、西洋の形式に合わせ

について清田や岩谷は、鷗外と渡邊が重なるとした上で、それぞれ「官吏の一人であることを自覚して、公にかかわっていく態度を持っている」姿(35)、ないし「進歩性、新しい思想・発見の全てを打ち消して日本人、俗物となりきる。日本の封建性、保守性、しきたり風習の全てを受け入れて生きてゆく」姿が読み取られるとした(36)。両者ともに、渡邊の「フィリステル」という表現は、鷗外の決意、人生観の現れであると主張している。

確かに小平らの言うように、彼は周囲から「官吏」としての理想的な姿が求められていただろうし、すでに「参事官」という高い地位にあって向上心を必要としなかった側面があつただろう。しかし、その姿はあくまで「なり済ましていく」ものであることを見逃すことはできない。つまり、彼はあくまでも外部から期待される国家公務員としての「渡邊」を演じているに過ぎないのである。そして同時に、内部にある「フィリステル」ではない自己を自覚している。西洋の視点から観察し、テクスト内時間時点の日本が西洋的、先進的ではない、と批判する自己である。

そんな彼が「きょうの晩飯丈が破格」だと言う。これは、女と会食する今晚だけ、言い換えれば今こ

の精養軒の中においては普段と違う、と宣言していることになる。女との会話はドイツ語で行われ、精養軒の給仕には話の内容は伝わらない。それは彼女が、女に対して芝居をするなど思っている描写から読み取れる。彼の言う女の「芝居」とは、「長く待たせて」とぞんざいなドイツ語で話しながらも、仕草だけは淑女らしくするということなのであった。給仕がドイツ語を理解しているとすれば、女は言葉遣いにまで気を回す必要があったらうし、彼女が女の「芝居」に合わせた動きをする必要もなかったはずである。ここから、給仕が二人のドイツ語の意味を理解していないことがわかる。つまり、ドイツ語で話すのならば、給仕たちの前で彼が「フイリステル」を装う必要はなくなるのである。その意味で「きょうの晩飯丈が破格」なのであり、精養軒の中では西洋的な感覚を持つ自己を隠匿する必要がないのである。

渡邊の〈内部〉とは、すなわち西洋的な感覚を持つ自己であるが、彼の〈内部〉は先に述べたように、精養軒の中に入ってから表出する。彼は精養軒の内装を見て「日本は芸術の国ではない」と言い切るなど、周囲のものに極めて否定的な評価を下す。しかし、電車を降りてから精養軒に入るまでの道すがら、彼は全くと言っていいほど否定的な評価を抱いてい

テル」を装うべき場所へと変化させているのだ。つまり、この場面で彼は〈内部〉を見せることができず、相手に対して、〈外部〉として断ることで、女の期待を完全に拒絶するに至ったのである。

おわりに

これまで「普請中」のテキスト内時間は、鷗外の伝記的事実から「発表当時」テキスト内時間」として捉えられてきた。しかし、歴史的事実に基づいてテキスト内の記述を見ると、テキスト内時間は発表よりも一年ないし二年前であると特定できる。また、テキスト内にはいくつもの二項対立が隠されている。木挽町と愛宕山における「近代と前時代」、愛宕山の上下における「裕福さと貧困さ」、「日本人の男と西洋人の女」といった様々な二項対立が重層的に作用しあうことで、明治四〇年代初頭の近代化を目指す日本の姿を描き出した作品だと言えるだろう。その都市空間の中で、登場人物たちがいかに表現されていたのか。女の〈不安定〉な「身の上」は、愛宕山周辺の都市イメージに投影され、彼女とは対極に〈安定〉した生活を送る渡邊の心象空間は、精養軒の内外に現れていた。

ない。「水溜り」や「役所帰りらしい洋服の男」たち、「お茶屋のお姉さん」、「幌を掛けた儘の人力車」の様子を精細に描写してはいるが、そこに否定の色は見えない。細かく周囲を観察するが、それだけである。改善すべき点があるにも関わらず指摘しないその姿は、まさに渡邊が普段装っている〈外部〉すなわち「フイリステル」そのものである。彼が精養軒の外にいる場合には〈外部〉の姿が窺え、精養軒の中では彼の〈内部〉の姿が現れている。これは、彼の「本当のフイリステルになり済ましている。きょうの晩飯丈が破格なのだ」という言葉通りであろう。

しかし、彼は女の「キスして上げてでも好くって」という提案を、「ここは日本だ」と拒んでいる。小平は「場をわきまえての抑制なのだから、彼は日本でなければキスに応じたはずだ」と述べているが(37)、この指摘は彼が「冷淡な心持」であることと一致しない。彼は誰が現れようとも構わない程の「心持」であり、かつての恋人である女と、今一度特別な関係になるつもりはないのだ。

「ここは日本だ」という言葉は、改めて精養軒が彼にとって西洋的な場所ではないことを確定させる。この言葉によって彼は、それまで本来の自己を見せることができる場所だった精養軒の中を、「フイリス」は、国家公務員としての自身の生活のために必要不可欠な感覚であったし、西洋の感覚を持つ自己である〈内部〉もまた、本来の自己を見失わないための重要な感覚であった。その彼が、女とのやり取りの中で〈内部〉と〈外部〉を意識的に切り替え、女の期待を拒絶するに至る。つまり、彼は〈内部〉と〈外部〉を自由に行き来することができる存在なのである。「普請中」は、〈普請中〉の日本という、日本的な感覚と西洋的な感覚の両方が必要とされる国で生きる渡邊の、心象空間の移行の物語なのである。

注

- (1) 阿部次郎「六月の小説」、「ホトトギス」十三ノ十二、一九一〇年七月(稲垣達郎編『森鷗外必携』、一九六八年二月、学燈社)所収。
- (2) 三島由紀夫「鷗外の短編小説」(「文芸」、一九五六年一月)
- (3) 竹盛天雄「『普請中』の問題」(「国文学解釈と教材の研究」第二四卷六号、一九七九年五月)
- (4) 西村好子「『普請中』論―語り手という視点から―」(「近代文学研究」第二卷、二〇〇八年四月)

- (5) 小平克「森鷗外『普請中』と『舞姫事件』——『普請中』の本文読解とトポスの読解——」(『近代文学資料と試論』第一〇号、二〇〇九年六月)
- (6) 清田文武『『普請中』の世界』(『鷗外文学の研究中心編』所収、一九九一年一月、有精堂)
- (7) 竹田日出夫「北村透谷『漫罵』」(『武蔵野女子大学紀要』第三四巻一号、一九九九年三月)
- (8) 磯貝英夫、鑑賞日本現代文学『『森鷗外』(一九八一年八月、角川書店)
- (9) 森林太郎「衛生都城の記」(『衛生新誌』第一三三号、一八九〇年一月)
- (10) 岩谷泰之「森鷗外『普請中』研究——明治二十年代の『東京市区改正』を中心に——」(『国文学試論』第二二号、二〇一三年三月)
- (11) 中村敏弘「東京ホテル建築史 1868年〜1939年——その意味と多様性」(『法政大学大学院紀要 デザイン工学研究科』第二巻、二〇一三年三月)
- (12) 『建築雑誌』第二二巻二六一号(一九〇八年九月)
- (13) 阪庭清一郎、萱場柔寿郎『新編植物図説』(一九〇六年一月、松栄堂)
- (14) 大塚美保「(外交交渉)物語としての『普請中』——(作者)の新たな構築をめざして——」(『国語と国文学』第七七巻五号、二〇〇〇年五月)

- (15) 11に同じ。
- (16) 藤森照信『銀座建築探訪』(二〇一二年五月、白揚社)
- (17) 『東京風景』(一九一一年四月、小川一真出版部)
なお、引用は「国立国会図書館デジタルコレクション」にて拠る。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/764167/23>
最終閲覧二〇一六年二月一三日
- (18) 16に同じ。
- (19) 桐敷真次郎『明治の建築』(二〇〇一年四月、本の本社)
- (20) 佐藤紘司「芝愛宕山の移りかわり——JOAK・東京放送局の設立——」(『東京都江戸東京博物館都市歴史研究室編、東京都江戸東京博物館調査報告書 第27集「芝地帯を考える——愛宕山・増上寺・芝神明」』(二〇一二年一月))
- (21) 運輸省鐵道總局業務局觀光課「日本ホテル略史」(一九四七年)
また昭和八年には、永井荷風が晩餐のために当地を訪れた際、フランス航空団が貸し切っていたために晩餐を諦めざるを得なかったことを記している
〔断腸亭日乗〕『荷風全集』第一九巻、一九五一年、中央公論社)。当地が長く外国人に利用されていたことが窺える資料である。

- (22) 寺門静軒『江戸繁昌記』三編(一八三四年、克己塾)
なお、引用は日野龍夫校注、新日本古典文学大系100『江戸繁昌記 柳橋新誌』(一九八九年十月、岩波書店)にて拠る。
- (23) 松原岩五郎『最暗黒之東京』(一九九三年、民友社)
なお、引用は岩波文庫版『最暗黒の東京』(一九八八年五月)にて拠る。
- (24) 『普請中』『鷗外全集』第二巻(一九九五年七月、筑摩書房)、八二頁。なお、以下本文の引用は同全集に拠るものとし、適宜現代語表記に改め、ルビを省略した。
- (25) 斎藤兼次郎「下谷万年町貧民窟の状態」(『直言』、一九〇五年七月)なお、引用は中川清編『明治東京下層生活誌』(一九九四年九月、岩波書店)所収に拠る。
- (26) 23に同じ。
- (27) 11に同じ。
- (28) 勅令第五十号(一九九〇年三月二七日)(『法規便覧』(一九九〇年)に拠り、「国立国会図書館デジタルコレクション」にて閲覧した。
- (29) 勅令第九六号(一九九二年一月一四日)(『法令全書』(一九九二年)に拠り、「国立国会図書館デジ

- タルコレクション」にて閲覧した。
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/787987/13/>
最終閲覧二〇一六年二月一三日)
- (30) 横山源之助『日本之下層社会』(一九九九年一月、教文館)
- (31) 24に同じ、七七頁。
- (32) 24に同じ、八〇頁。
- (33) 24に同じ、注釈「フィリステル」の項に拠る。
- (34) 5に同じ。
- (35) 6に同じ。
- (36) 9に同じ。
- (37) 5に同じ。

付記

参考資料の調査等に関して、今野優香氏、森山陽氏に御尽力いただきました。心より感謝申し上げます。